



ファインダーを真剣に覗いてシャッターを切る。



『心と気持ちのジャングルジム』
第6学年2学級57名

平成20年12月1日
東京都多摩市立多摩第三小学校
柴崎 裕教諭の授業



柴崎 裕教諭
写真/城ノ下俊治

私はこれまでも、子どもたちの写真表現の可能性を強く感じてきた。この時代の子どもたちは、幼児の頃から様々なビジュアル表現に晒されて生活しており、そこから多くのメッセージを受け取る正にビジュアル・ネイティブな存在と言えるのではないだろうか。ひとりに1台渡されるデジタルカメラによって、その彼等の感性は躍動し始める。枚数の制約を受けずに、ディスプレイによって映像を直ちに振り返る。その直截な出力と入力の間によって、自分のイメージを探る創造的なサイクルに促がされていくようだ。

今回は、6年生で、約10時間をかけて製作した立体作品『心ときもちのジャングルジム』をもとに、色々な状況を選択・構成して写真を撮る授業を設定した。プロカメラマンから直にコメントをもらえる状況は、活動に強い集中力をもたらし、作品と背景の見え方を意識し地面にへばりついたり、太陽光線の加減や影を、息を呑んで見つ



めたり、作品と浮かぶ雲を画面上でコラボさせたり、子どもたちは正に、慣れた環境・空間・日常をカメラという媒体を通して新たに発見し、そして自らのイメージ生成に挑戦していた。

公教育が対象とする美術教育において、写真表現は未だにラディカルな存在だが、ビジュアル・ネイティブとしての子どもたちの可能性を、直視しなければならぬのではないだろうか。ファインダーを覗いてシャッターを押す、誰にでもできる平易な行為は逆に、メモリーに記録された映像によって、子どもたちの見る世界や、瞬間に立ち現われる対象への働きかけ、個々の生きた創造的な技能の軌跡を私たちは垣間見る。子どもたちの姿に新たな立体感をもたらすこと、その教育的な意味は大きい。

文/柴崎 裕